

## わがシッドの歌(二) (承前)

## 第二歌

作者不詳 岡村 一 訳

ピバールの人ミオ・シッドの勲しの物語、これよりはじめることにいたします。

アルカント峠を根城としていたミオ・シッド、やがてサラゴサなど内陸の地、はたまたウエーサやらモンタルバンのあたりやらを捨て、塩水湛える海の方面へ矛先を転じました。すなわち日のさしのぼる東のかたへ馬首を向けたのでございます。こうしてミオ・シッドはヘリカ、オンダ、アルメナラを手に入れ、プリアナ一帯も残らず切り従えました。造化の神、天にまします主がお助けくださっております。シッドはなおそのうえムルビエド口までも奪取。われに天佑あり、ミオ・シッドはそう感じておりました。バレンシアは震えあがりました。焦りました。いやもう心平らかならず。そこで衆議一決、シッドを包囲しに向かうことになり、夜行軍で移動。夜明けにムルビエド口近郊に陣を張りました。それを見て「ほう」と驚いたミオ・シッドでしたが、

「感謝いたします、霊のおん父！——われらはかれらの土地に居座り、手あたりしだいに荒らしまわっている。かれらの酒を飲み、かれらのパンを食らっている。囲みにくるのも道理。ここは一戦交えずには済むまい。加勢に馳せ参るべき者たちへ使いを送れ、ヘリカ、アルカドへ。それからオンダ、アルメナルへ。プリアナの者どもにも遅れるなと伝えよ。野に打って出て戦おう。われら、天佑を得てさらに富を積むことになろう」

三日後に軍勢が揃うと、よき星のめぐりのもと生を受けし人は、こう鼓舞いたしました。

「皆、聴いてくれ。一同に神のご加護があるよう！ われらは清浄なるキリスト教徒の地を去らねばならなかった。無念ではあったがいたしかたなかった。だが、それよりのちは天佑を得て連戦連勝。今はバレンシア軍に包囲されているが、もしもこの地で生きてゆこうと望むなら、あれに痛打を浴びせるほかはない。夜が過ぎて朝がくるそのときまでに、鎧兜を着け馬に乗っておけ。いざ、あの敵陣へ攻め込もう。生国を追われ異郷にある身として誰が俸給に値するか、いくさ場で明らかとなろう」

それ、ミナーヤールバル・ファネスが申します。

「カンペアドルよ、われら、おおせのままに。わたくしに百騎お貸しを。それだけあれば十分。殿は残りの軍勢を率いて正面より攻めかかり、思う存分戦われませ、なにを恐れもなさるまいゆえ。こちらは百騎率いて側面を衝きましょう。これで勝利は手にしたも同然」

カンペアドルはこの献策に異議なく同意いたしました。

朝が近づき、支度がはじまりました。各自、役割をしっかりと心得ております。夜明けとともにミオ・シッドは突撃を開始。

「造化の神と使徒聖ヤコブの御名において、かかれ、者ども！ 全身全霊を傾けよ！ われこそはルイーディアス、ビバールのミオ・シッドなり！」

それ、幕舎の綱がつきつき切られてゆく。つきつき杭が抜かれ支柱が倒れる。しかしスラム方は大軍、ほどなく態勢を立て直しにかかる。が、そのとき、側面からアルバルフ・ファネスが突っ込んでくる。モロは無念の涙を呑んで逃げるか降参するか。虎口を脱した者は死に物狂いで馬を駆けさせました。いくさ場は歓喜に沸きました。モロ方は二人の将軍が追いつかれて討ち取られました。追撃戦はバレンシアまでつづきました。ミオ・シッドは莫大な戦利品を獲得。シッド軍はさらにセボーリヤを落城させ、その先もことごとく落としました。やがていくさ場に遺棄された財物をかき集め、引き揚げにかかります。莫大な戦利品を携えムルピエド口へ凱旋する

シッド軍。ミオ・シッドの勲しは、さあもう轟き渡つてゆきます。バレンシアは震撼し、立ち竦みました。シッドの勲しは海の向こうまでも鳴り響きます。

シッド一党は、天が味方して与えたもうたこの勝利に沸きました。このあと略奪隊が繰り返し放たれました。これらは夜陰に紛れて移動。クレーラを襲い、ハティバを襲い、さらにその先、デニアの城市も襲いました。こうして海沿いのモロの土地を容赦なく荒らしまわり、ペニヤ・カデイエリヤ城とそこへ通じる道、そこから通じる道まで押さえるに至りました。ペニヤ・カデイエリヤ城がシッドカンペアドルの手に落ちたことは、ハティバにはたいへんな衝撃。クレーラにとつても同じ。バレンシアに至つては、その恐怖は計り知れません。

モロの地に盤踞して、昼間は眠り夜になつたら動きだして、奪い、分捕り、ミオ・シッドはこうして三年かけてこれらの城市を支配下に置きました。懲りていたバレンシアは、もはや打つて出て一戦交える気力は消えてなくなつております。ミオ・シッドはその間くる年もくる年も畑を荒らして大損害を与え、食料を奪いました。バレンシアは立ち往生。塗炭の苦しみ。なにしろどこからも食料がはいつてこないのです。父は子を、子は父を助けるに術なく、友は友を慰める言葉を持たず。皆様方、食べ物がなほ耐え難い苦しみがございます。子でしょうか！ 子が、妻が、飢えて死ぬのを見ねばならぬほど！ この悲惨なありさまを目の前にしてなす術のなかつた者たちは、たまらずモロツコ王へ使者を送りました。けれどモロツコ王はモンテス・クラールスの王と大いさの真つ最中。援軍を送れず、ましてみずから乗り出すこともできません。それを知つたミオ・シッドは、しめたとほくそ笑みました。そこである夜ムルビエド口を発つて闇に紛れて移動。明け方モンレアルの地に着くと、人を遣つてアラゴンとナバラ内を触れまわらせ、またカステイリヤ各地へも口上を伝えさせました——貧苦を脱し富を積みたい者は、ミオ・シッドのもとへ馳せ参ずべし。ミオ・シッドはバレンシアを囲み、これをキリスト教徒のものとするべく愛馬に打ちまたがらんとしている——。

「わが旗のもと、バレンシア攻めに加わりたい者があれば、カナル・デ・セリヤにて三日待つ。勇躍して参陣せんとする者のみきたれ。無理は強いぬ」

ミオ・シッドはよき星のめぐりのもと生を受けし人は、これだけの手筈を調べると、わがものとしていたムルビエドロへ戻りました。

さあ、それから触れ役が各地を隈なくまわりました。これぞひと儲けの好機、それ遅れるなど、神聖なるキリスト教の国々から、つわものがわれもわれもと馳せ参じてまいります。事実、ビバールの人ミオ・シッドの富は増すばかり。ミオ・シッドはドン・ロドリゴは、集まってきたつわものを見て満足げな様子を見せ、このうえは一刻も早く、ただちにバレンシアを指して進発、そして攻撃にかかりました。このたびは策は用いず、水も漏らさぬ包囲陣を布いて、人っ子一人出はいりできぬようにいたしました。この報が四方へ伝わると、参陣する者がさらに増えました。去る者など、それはもうただの一人もなし。ミオ・シッドはバレンシアに対し、救援を求めるための猶予を与えました。包囲は実にまる九ヶ月間に及び、十ヶ月目ついに開城。ミオ・シッドがバレンシアを落として入城したとき、陣営は歓喜に沸き返りました。徒武者は騎馬武者となりました。手に入れた金銀は途方もない量。軍勢に加わっていた者たちは、誰もが富を手に入れました。ミオ・シッドはドン・ロドリゴは取り分として五分の一を収めました。その中身は貨幣だけでも三万マルコ。そのほかの財となると計り知れぬほど。天主のてつべんに大将旗が翻ったとき、カンペアドルとその麾下の者たちの中から、どつと歓声があがりました。

ミオ・シッドとその軍勢が戦塵を洗い落としているころ、「バレンシア、防戦空しく陥落」との報がセビーリヤ総督へもたらされました。総督は三万の兵を率いて来襲。戦いは畑地の近くで行なわれ、長髯公ミオ・シッドはセビーリヤ軍を撃破。追撃はハティバへ至つてなおつづきました。ああ、フカル川を渡るモ口勢のあわてふためきよう！ 逃げるモ口どもが心ならずも水を飲むさま！ セビーリヤ総督自身、三太刀あびせられ敵に後ろを見せるていたらしく。やがてミオ・シッドは戦利品を残らずかき集めて凱旋いたしました。バレンシアの都城を落とした際にも相当のものを手に入れましたが、このたびの勝利で得た財物は、いやもうそれを凌ぐ量。雑兵すらあまねく銀百マルコの分配にあずかったほど。われらが騎士の武名は、さあそれはもう遙か遠くまで鳴り響いたのでございます。

キリスト教徒は皆、ミオ・シッド・ルイ・ディアスよりよき星のめぐりのもと生まれいでし人とともに、勝利の美酒に酔いしれました。すでに長くなつていたシッドの髯は、ますます伸びつつありました。ミオ・シッドは、かねてよりその口でこう公言しておりました。

「わたしはアルフォンソ国王陛下に国を追われている身。君寵の戻ることを願ひ、髯に銖を入れまい、毛のひと筋たりと刈るまい。この誓ひ、人口に膾炙して欲しいものだ」

ミオ・シッド・ロドリゴはバレンシアで体を休めておりました。かたわらには、影が形に寄り添うごとくミナーヤ・アルバル・ファネスの姿。かつて国を去つた者たちは、いまや溢れんばかりの富を手にしております。よき星のめぐりのもと生を受けし人は、各自に対し満足するに足る家屋敷と領地を与えてやつておりました。皆々ミオ・シッドの恩を身に感じておりました。当初から行をともししていた者も、後から加わつた者も、誰もが等しく満足。他方ミオ・シッドは、できることなら手に入れた財物を持って、飛んで帰りましたがっている者のあることを見抜いておりました。そこでミナーヤからの具申を渡りに船と、次のように告げました——わが家臣たる者は、わたしに断わりなしに黙つて立ち去るべからず。もしも背けば追捕のうえ財産没収、その身は吊るし首とする。さあ、こうして万事しかるべく処置いたしますと、次にミオ・シッドはミナーヤ・アルバル・ファネスにこう相談を持ちかけました。

「どうだろう、ミナーヤ。ここに在る者の数、わたしのもとで富を得た者の数を調べたく思うが。名簿を作つて総数を数えるつもりだ。もしも記載を逃れ、名簿に名前のない者を見つけたら、財産を返させ、バレンシアの守りにあたり、また見張りに立つわが家臣らに与えようと思う」

聞いてミナーヤは「それはよい考え」と賛成いたしました。そこでミオ・シッドは、広間に参集せよ、全員集まれと命じ、揃つたところで人数を数えさせました。ビバルの人もミオ・シッドのもとには、三千六百人いることがわかりました。喜びがこみあげたシッドは笑みを浮かべ、

「神と聖母マリアに感謝申さねばな、ミナーヤ、ビバル村を出たときのさびしさを思えば！　いまやわれら

は富も得た。この先さらに積むことになる。もしよければ、ミナーヤよ、もしも面倒でなければ、われらが領地のあるカステイリーリヤへ使いつてきてはくれまいか。アルフォンソ国王陛下、わが生国のあるじのもとへいつて欲しいのだ。われらが当地で勝ち取った財物の中から、軍馬百頭ご献上申したい。それを連れていつてくれ。しかるのちわが名代として御手に接吻し、伏してお願ひ申してくれ、わが妻子を呼び寄せることをお許し願ひたいとな。こちらから迎えを出そう。三人にはこう伝えてくれ、ミオ・シッドの妻と幼い娘らに迎えがいき、われらが攻め取ったこの異郷の地へ、まこと晴れがましく赴くであろうとな」

これにミナーヤは「かしこまりました」と。こうしたやりとりのあと支度がはじめられました。ミオ・シッドは道中の供としてアルバル・ファネスに百人与えました。(……)そうして、サン・ペドロ修道院へ銀千マルコ持つていくよう申しつけました、ドン・サンチョ修道院長へ寄進するようにと。

こうした一連のことに人々が心浮き立っているさなか、東の国から僧が一人やってまいりました。僧の名はドン・ヘロニモ司教。文に明るく人となり重厚ながら、戦つては立つてよし馬でよしの荒法師。いくさ場にてモロと渡り合わんと、ミオ・シッドの武勲を尋ね歩いてやつてまいりました。武器をふるい心ゆくまで戦つたのちは、われ死すときなんびとも嘆くまじ、と言ひ放ちました。知らせを聞いたミオ・シッドは欣然として、

「なあミナーヤリアルバル・ファネス、どうだろう。天、助けたまうときは、われら深い感謝の念を忘れてはならぬ。バレンシアの地に司教区を設け、この勇敢なキリスト教戦士に与えようと思うが。カステイリーリヤへは、いろいろとよいみやげ話を持ってゆけるな？」

ミナーヤはドン・ロドリゴの言葉に賛同いたしました。さつそくこのドン・ヘロニモは司教に推戴され、バレンシアで豊かに暮らせる領地が与えられました。ああ、全キリスト教徒にとつてどれほどの喜びであったか、バレンシアの地に司教猊下の誕生とは！ ミナーヤは旅立ちの挨拶をしたのち、心も軽く旅立ちました。

平穏な日々つつくバレンシアの地をあとに、ミナーヤリアルバル・ファネスはカステイリーリヤへ向かいました。どこどこに泊まったなどということは省きます。いちいち語りませぬ。ミナーヤは、どこへゆけばお目通

りできるであろうかと、アルフォンソ王の居場所を尋ねました。すると、少しまえにサアゲンへゆかれ、そこからカリオンへまわられたので、そこで拝謁たまわれようとの返事。それを聞いたミナーヤールバル・ファネスは、おお、そうかとうなずき、用意してきた献上物とともにそちらへ向かいました。

そのときアルフォンソ王はミサを終えて出てきたところ。さあ、そこへミナーヤールバル・ファネスが衣服を整えやってまいりました。ミナーヤは衆人環視の中ひざまずくと、胸詰まる様子を見せて王の足もとにかしこまり、手に接吻して言上しはじめました。実に非の打ちどころのない言葉でございました。

「なにとぞ、陛下、どうかかなにとぞ！ 闘将ミオ・シッド、英邁なるあるじのみ手に、おみ足にご接吻申し、伏してお慈悲を願いたてまつると。君寵を失い国を追われたわがあるじ、異郷にありながら立派に武威を張っております。ヘリカ、そしてオンダなる城市を落とし、アルメナラ、さらには一頭地を抜くムルビエド口を奪取つづいてセボリヤ、さらに進んでカステリオン、また突兀たる岩山の上にそびえるペニヤ・カディエリヤを攻略。これらのあるじとなつたうえ、加えていまやバレンシアまでも支配。向かうところ敵なしのカンペアドルは、わが手で司教を任命。戦つては五度の野戦で一度も遅れを取らず。天がどれほど財物をくださったことか。ごらんあれ。これがその証し。わが言葉に偽りなし。馬具一式着けた太く逞しい駿馬百頭。ミオ・シッドはこれをご嘉納たまわるよう願ひあげたてまつると。あるじはみずからを王臣と思ひ定め、陛下を主君と仰いでおります」

王は右手をあげて十字を切り、

「なんとカンペアドル、それほど莫大な富を得たか！ 聖イシドロに誓つて心底うれしく思うぞ。カンペアドルの立てておる手柄の数々についても同様だ。この馬、献じてくれると申すなら受け取つておこう」

王の上機嫌をよそに、おもしろからぬ気分はガルシ・オルドネス——

「イスラムの地は無人と見えますな。シッド〓カンペアドルがこうも好き放題やれるとは！」

すると王は伯に、

「口を慎め！ どうあれそなたよりは忠義を尽くしてくれておる！」

ミナーヤはそれを聞き、勇を鼓して申しました。

「おそれながらシッドよりひとつお願いが……妻のドニヤ・ヒメーナと二人の娘のこと。預けている修道院を出てバレンシア、忠義のカンペアドルのもとへまいることをお許しくださいたく」

すると王は、

「よいとも。わが王国を出るまでは、こちらで食べ物のお面倒を見る手筈を調べよう。また、道中危うい目に遭ったり、危害を受けたり、辱めを受けたりせぬよう警護もさせよう。国ざかいを出たあとは、そなたやカンペアドルが気をつけて面倒を見てやるがよい。——聴け、近臣たち、群臣百官！ これからは、万事カンペアドルの不利にならぬようはからってゆくつもりだ。カンペアドルがあるじと仰ぐその近臣らに対しては、召しあげた所領を誰彼の区別なくそっくり返すこととする。今後はあるじに従いどこにおろうと所領は安堵。その身の無事も請け合い、危害から守ろう。カンペアドルがあるじと仰ぐかぎり、このこと相違ない」

ミナーヤ||アルバル・ファネスは王の手に接吻。王は微笑み、それはすばらしい言葉をつづけました。

「あちらへまいってカンペアドルに仕えたい者があれば、これを許す。造化の神のご加護のもと旅立つがよい。罰しても無益。こうするほうがわれらの利は大きかろう」

このときカリオンの公子兄弟がひそひそ話しはじめました。

「ミオ・シッド||カンペアドルの武名は高まるばかり。娘を娶るのは悪くない。さぞかし甘い汁が吸えるにちがいない。だがこの話、素直には切り出せぬ。なんといつてもミオ・シッドはビバールの山出し、われらはカリオン伯の一門だからな」

このときは誰にも言いださぬままこの話は終わりました。

誉れ高き王に暇乞いするミナーヤ||アルバル・ファネス——

「はやゆか、ミナーヤ！ 道中の平安を祈つておるぞ。小姓を一人連れてゆくがよい。さぞ役立つてくれよう。婦人らがそなたに連れられてゆく道中、なに不自由なく過ごせるよう命じておこう。メディナセリへ着くま



では、要るものはなんであれ用意させる。それより先はカンペアドルに任せよう」

ミナーヤは別れの挨拶をして宮廷を後にいたしました。

カリオンの公子兄弟は(……) ミナーヤ・アルバル・ファネスにつきそいながら、

「貴殿はなにをさせてもそつのないお人ですな。ひとつこれもどのようにやつてくださるまいか。ミオ・シッド、ビバルのお人によくお伝え願いたい。われらはできるだけかのお人のお役に立つつもり。われらと昵懇にしておいて、けつしてシッドの損にはなりませんまい」

ミナーヤは答えて、「お伝え申すのはさしつかえございませぬ」と。

ミナーヤは発ち、公子兄弟は引き返しました。サン・ペドロ修道院へ向かうミナーヤ。そこには婦人たちが身を寄せております。ミナーヤの姿が見えたとき、修道院はどれほど喜びに沸いたでありません！ 下馬したミナーヤはまず聖ペテロに祈りを捧げ、終えると婦人たちのもとへいつて、

「謹んでご挨拶申し上げます、ドニヤ・ヒメーナ。神が奥方様を災いからお守りくださいますよう。また幼い姫様方も。ミオ・シッドが、住まいするかの地より挨拶を送ると。あるじはつつがなく、そのうえいまや巨万の富の主。このたび陛下は格別のご配慮、奥方様らを自由の身とし、われらが領地としたバレンシアへお連れ申せるよう、おとりはからいくございました。シッドはご家族の無事息災なお姿をごらんになれば、さぞ愁眉を開いて欣喜雀躍なさろうかと」

「そうなればうれしいことです」と、ドニヤ・ヒメーナは申しました。

ミナーヤ・アルバル・ファネスは三騎を先立たせ、ミオ・シッドのもとへ、根城とするバレンシアへ向かわせます。

「カンペアドルにはこうお伝えせよ(神よ、あるじを災いより守りたまえ!)、陛下が奥方様と姫様を自由の身とし、なおそのうえ王国内を通るあいだ食べ物に困らぬよう、おとりはからいくございました、神がわれらを災いより守りたまえば、殿の奥方様と姫様、またお三方に忠実にお仕える侍女らも残らず引き連れ、これから半

月ほどでそちらへ着きましよう」と、このように「

発つていった三騎、しかるべく役目を果たすことをごいませう。他方ミナーヤ・アルバル・ファネスは、引き続きサン・ペドロ修道院に留まります。それ、処々方々よりつわものらが馬で駆けつけてまいります、パレンシアへいきビバルの人ミオ・シッドの旗のもとに集おうと。人々がアルバル・ファネスに口利きを頼むと、そのたびミナーヤは「おお、喜んで」と引き受けてやりました。こうしてミナーヤ一行には、もとの百騎に新たに六十五騎が加わり、婦人らの随行のためのちよどよい一隊ができあがりました。

ミナーヤは修道院長に五百マルコ寄進いたしました。残り五百の使い道といえば、さすが心利くミナーヤ、ブルゴスへ赴き、ドニヤ・ヒメーナ親子、親子のそば近くに仕える侍女らのため、そこで目についたとびきり美しい衣服、それに馬やラバを買い揃え、世間に恥ずかしくないようにいたしました。こうして気働きのよさを發揮し、婦人たちに支度させたあと、ミナーヤがいよいよ馬に乗ろうとしたそのとき、さあ、そこにラケールとビダス。足もとにうづくまると、

「後生でございませう、ミナーヤ、人にすぐれた騎士様！ シッドのためわたくしどもは破産の憂き目、ほんとうになんとかしていただかねば！ 利子は諦めてもよろしゅうございませう。せめて元金だけでもお返しくださいませ」

「神のお導きを得て無事あちらへ着くことができたならば、シッドとお話ししてみよう。そなたらの助力に対しては十分な報酬があるう」

するとラケールとビダスは、

「なにとぞぞそうお願い申します。でなければわたくしども、ブルゴスを発つて、あちらへお目に掛かりにまいりますので」

ミナーヤ・アルバル・ファネスはサン・ペドロ修道院へ向かいました。そこにはつわものがひっきりなしに集まっております。いよいよ出立の時。修道院長との別れは断腸の思い――

「造化の神のご加護がございますよう、ミナーヤリアルバル・ファネス！ 拙僧に代わってカンペアドルのお手に口づけし、当院をお忘れあるなどお伝えくださいませよ。いつまでも変わらずお引き立てくださいませ、シッドのおますますのご武運隆盛は疑いなし」

それに対してミナーヤは「かならず申し伝えます」と。いよいよ別れを告げ出立。一行には世話を命じられた小姓が付き添い、王国を通過するあいだ食べ物が十二分に供されました。アルバル・ファネスと婦人たちは、サン・ペドロ修道院からメデイナセリまで五日かけて到着すると、いったんそこで足をとめました。

一方、使者の役目を言いつかつた三騎——。口上を聞いたビバルの人もミオ・シッドは、心躍り顔がばつと輝きました。そうして口を開いて申すには、

「これでこそ心利いた使いを送つたかいがあつたというものだな！ これ、ムニョ・グステイオスよ、それにペロ・ベルムデス、加えて忠義のブルゴス者マルティン・アントリネスよ、傑僧ドン・ヘロニモ司教よ、百騎に鎧わせ、連れて発て。サンタマリアを通り、その先、モリーナへゆくのだ。その領主はわが盟友アベンガルボン。百騎を率いて万全の警護をしてくれよう。それからのは一路メデイナセリめざしひた走れ。聞けばそこにわが妻と娘らが、ミナーヤリアルバル・ファネスに守られ待つと言う。たいせつにたいせつにわたしの前まで連れてきてやってくれ。わたしはバレンシアに残つておらねばならぬ。なにせ苦勞を重ねた末手に入れたこの都城。留守にするのは愚の骨頂。わたしはバレンシアに残つておらねば。なにせここはわが一所懸命の地」

ミオ・シッドの言葉に従い一行は出発。途中休まずひたすら先を急ぎます。サンタマリアを突つ切り、ブロンチャレスへ至つて一泊。翌日はモリーナで一泊。モロのアベンガルボンは、知らせを聞くと「おお、そうか！」と喜び、迎えに飛び出してまいりました。

「よくぞおみえになつた、わが刎頸の友の家臣のかたがた！ これはわたしにとつて迷惑ならざること。いやいや実にうれしいこと」

ほかの者が言うのを待たず口を開いたのはムニョ・グステイオス、

「ミオ・シッドは貴殿に挨拶を送り、ただちに百騎引き連れてのご助力をお手配くださるようお願い申すと。メデйнаセリで待つ奥方と姫を迎えにいつて当地へ連れ帰り、それからバレンシアまで片時も離れずご同道願いたいと」

アベンガルボンは「むろんお役立ちいたす」と答えました。その夜、アベンガルボンは一行を贅沢な夕食でもてなし、明るる朝ともに発ちました。求められたのは百騎。しかし引き連れていたのは二百騎。一行はなんの恐れ気もなく深く険しい森を通り、カンポ・タランスを突つ切つたのち、やがてアルプフエロの谷をくだりにかかりました。一行の姿を見てメデйнаセリでは身構えました。ミナーヤはその正体を探らせるため、二騎を送り出しました。心得たとさつと飛び出した二騎。やがて一騎はあちらへ合流、もう一騎がアルバル・ファネスのもとへ戻つてまいりました。

「カンペアドルの軍勢がわれらを迎えにきたのです。それ、先頭をくるのはペロ・ベルムデス。そのあとにはムニヨ・グステイオス。殿を一途に慕う二人。それにブルゴス生まれのマルティン・アントリネス、至誠の僧ドゥン・ヘロニモ司教。加えて一城のぬしアベンガルボンも、ミオ・シッドに深い敬意をあらわし手勢を引き連れて。皆一団となつてやつてまいります。ほどなく到着いたしましたよ」

それを聞いてミナーヤは「馬に乗れ！」と。われ遅れじと、皆ただちに騎乗いたします。まず城市から駆け出したのは百騎。薄絹の馬衣着け、鈴を下げた胸懸飾つた太く逞しい馬に跨り、見苦しからぬいでたち。おのおの盾の紐を首に掛け、旗翻る槍を握っていたのは、人々にミナーヤの真心、いかに婦人たちを帯同してカステイリヤを旅してきたかを示すためでございます。先頭に立つて様子を見る役者たちは、やがて武器を手に演武をはじめました。ハローンの河畔は喜び一色となりました。バレンシアからやってきた者たちは、着くに従つてミナーヤへ挨拶にまいります。アベンガルボンもやつてきて、ミナーヤの姿を目にすると、快活な笑みを浮かべ歩み寄つて抱擁し、モロの習慣に則り両肩に接吻——

「やあやあ、ミナーヤ！アルバル・ファネス！よくぞこの婦人方をお連れ申してくれたな。闘将ミオ・シッ

ドの奥方と、そのお子たる姫たちのお供ができるとは、われらにとつてこのうえなき身の誉れ。貴殿も皆で丁重に遇さねばな。なにせシッドの武運は旭日昇天の勢い。敵にまわして敵いはせぬ。戦いの時、平和の時、いずれの時もわれらお役立ち申さねばならぬ。この道理のわからぬ者は大馬鹿だ！」

ミナーヤ・アルバル・ファネスはにこりと微笑み、

「なるほどアベンガルボン、貴殿は確かにシッドの味方！ もしもわたしが天祐あつてシッドのもとへ辿り着き、無事な姿を目にすることができたなら、今度の貴殿のこの働き、骨折り損とはなりませんまい。さあ、宿へゆこうではありませぬか。夕餉の支度もできている」

アベンガルボンは答えて、

「それはありがたい申し出！ 三日以内に倍にしてお返しいたそう」

一同打ち揃つてメディナセリへはいました。そこではミナーヤが接待役を務めました。そのゆきとどいた気配りに喜ばぬ者はございません。費用は王の小姓が受け持ちました。メディナセリではそれは豪勢な馳走が提供され、しかも費用は王のまる抱え、ミナーヤは一文も出す必要がなかつたとあれば、ミオ・シッドはバレンシアにいながらにして面目を施したのでございます。

さて、夜が過ぎ朝となりました。一同ミサにあずかつたあと馬に乗り、メディナセリを発ちました。ハローン川を渡り、アルプフエロの谷を一気に駆けのぼり、それからカンポ・タランスを突つ切り、やがてアベンガルボンの領する城市モリーナへ到着。その間、まこと勇敢なるキリスト教徒ドン・ヘロニモ司教は、常に婦人たちの身辺に目を光らせておりました。司教は右に太く遅い軍馬、後ろに武器その他の荷を積んだラバを引き連れ、アルバル・ファネスと轡を並べて進みました。一行がはいったモリーナは、大きく豊かな城市。ここではモロのアベンガルボンが、まさに下へも置かずもてなします。望むものはなんであれ提供し、馬の蹄鉄すら命じて付け替えさせるほど。ああ、ミナーヤと婦人たちはどれほど丁重にもてなされたことか！ 明くる朝急いで城市を発つたあとも、バレンシアへ着くまでアベンガルボンはそつなく気を配りました。しかもすべて自分の懐から賄

い、相手からはなにも受け取りません。一行は、真心こもる心配りの醸し出すこうした和やかな雰囲気の中、もうすぐバレンシア、あとちょうど三レグアという地点までやってまいりました。

そこで待つミオ・シッドは星のめぐりよきとき生まれいでし人のもとへ使いが到着。ミオ・シッドは欣喜雀躍、これ以上の喜びはおろか、同じほどの喜びも味わったことはいけません。なにせ愛してやまぬ者たちが到着したという知らせだったのでございます。シッドはただちに二百騎を、ミナーヤと貴婦人たちの出迎えに向かわせました。自身は残つて都城の監視と警護にあたったのは、アルバル・ファネスにわずかな手ばかりもないと、よく飲み込んでいたためでございます。

さあ、この二百騎、ミナーヤ、婦人と姫たち、一行のその他の人々を出迎えます。ミオ・シッドは都城にいる者たちに、本丸や聳え立つ塔の数々や各城門の守備を命じ、都城の出入りの監視を命じたあと、バビエカを引いてこさせました。これは少し前に戦利品として手に入れていた馬でしたが、ミオ・シッドはよき星のめぐりのもと剣を佩きし人は、これがどれほど駆け、どれほどびたりと止まってくれるものやら、いまだ試さぬままでございました。シッドは身の安全の砦であるバレンシアの城門の前、妻子の眼前で武技を披露しようと意気込んでおりました。ドン・ヘロニモ司教は、丁重至極な出迎えを受けた婦人たち一行に先んじて都城の中へはいり、下馬して礼拝堂へ向かいました。そうして法衣を纏い銀の十字架を手にすると、定時課の祈りを捧げる支度を整えていた僧を集められるだけ集め、婦人たちと忠臣ミナーヤを迎えに出ました。

かたや、よき星のめぐりのもと生まれいでし人も支度を急ぎます。鎖帷子の上にチュニツクを重ね、髻を長く垂らしました。それからバビエカに鞍を置かせ、馬衣を掛けさせて跨ると、木槍と盾を手に都城の外へ出ました。ミオ・シッドが跨ったそのバビエカという名の馬、駆けさせてみればなんと天馬さながら！ その見事な走りぶりに誰もが息を呑みました。この日以来、名馬バビエカの名は満天下に轟きわたったのでございます。ひと駆けしたあと、ミオ・シッドは下馬して妻と二人の娘の待つほうへ歩み寄りました。それを見たドニヤ・ヒメーナは夫の足もとに身を投げ出し、

「かたじけのうございませす、カンペアドルよき星のめぐりのもと剣を佩きし人！よくぞ数々の耐え難い恥辱からお救いくださいました！わたくしもあなたの娘二人も、旦那様、お前にこうして——。娘たちは神のご加護とあなたのおかげで立派に育っております」

シッドは母娘をひしと抱きしめました。四人は万感胸に迫り、はらはらと涙を落としました。シッド軍のつわものたちは誰もが喜び勇み、武器をとって演武をしたり城崩しに興じたり。お聴きあれ、よき星のめぐりのもと剣を佩きし人の言葉を、

「さあ、愛しい貞淑な妻よ、かけがえのないたいせつな娘たちよ、ともにバレンシアの都城へはいろいろではないか。そなたらのため勝ち取った領地だ」

母娘はシッドの手に接吻。それからまこと晴れがましくバレンシアへ入城いたしました。ミオ・シッドは妻子を連れて本丸へ向かい、天守へ登りました。瞳を輝かせて四方を眺めまわす母娘。眼下に横たわるのはバレンシアの街並み。目を転ずれば海原。どこまでも広がる実り豊かな畑も見えます。母娘は天へ向かつて手をあげ、よくぞこのようにすばらしい富をありあまるほどお授けくださったと、神に感謝いたしました。

ミオ・シッドや家臣団にとって一陽来復の日々がつづき、やがて冬が過ぎ三月になるうかという頃となりました。今度は海の向こう側、モロッコに君臨するかのユセフ王についてお話し申しましょう。モロッコ王はミオ・シッド・ドーン・ロドリゴに対し、怒髪天を衝きました。

「わが領土に押し入ったあげく、よりによってイエス・キリストに感謝を捧げているだ」と」

モロッコ王は兵を集め、鎧兜に身を固めた総勢五万の軍を編成いたしました。軍勢は船に乗り込んで出港。ミオ・シッド・ドーン・ロドリゴの盤踞するバレンシアをめざし、やがて着くと上陸を開始。この正しき教えを信じぬ者どもは、ミオ・シッドが奪い取った都城バレンシアへ押し寄せ、幕舎を立てて陣を張りました。知らせを聞いてミオ・シッドは、

「これぞ造化の神、霊のおん父の賜物！わが宝はすべて手もとにある。苦闘の末奪い取って領地とし、一所

懸命の地となったバレンシア。神と聖母マリアのおかげをもって、この地とともに暮らせるようになった妻と娘たち。なおこのうえ海の向こうからよきものがやってきてくれた。ここはひとつ、いくさ支度せぬわけにゆくまい。わたしのいくさぶりを妻と娘らに見せてやろう。いかにしてこのような異国で暮らしを立ててゆくか、それを教えてやろう。日々の糧を得る術をその目に焼きつけるのだ」

シッドは妻子を本丸へ登らせました。見晴るかせば幕舎を立てる様子が目に映ります。

「これはなんですか、シッド？ いったいこれは？」

「なに貞淑な妻よ、心配無用だ。このうえさらに莫大な富を積むのだ、目を剝くほどのな。近頃やってまいったそなたに贈り物をしようというのだ。やがて嫁にゆく娘たちの嫁資にと持参してくれたのだ」

「シッド、あなたと霊のおん父に感謝申しあげます」

「妻よ、この広間におらぬか、どうだ、本丸に？ わたしが戦うのを見ても恐れることはない。これぞ神と聖母マリアの賜物。そなたらが見守っていると思えば勇氣百倍。神のご加護のもと、このいくさ、勝利はまちがいない！」

朝の光が立ち並ぶ幕舎を照らしだしました。戦鼓が急調子で打ち鳴らされます。ミオ・シッドは心浮き立ち、眩きました。

「今日はなんとすばらしい日だ！」

シッドの妻は恐怖におののき、心臓が破裂せんばかり。侍女や二人の娘も同じ。大地を震わせるこのような響きを聞くのは、生まれて初めてだったのでございます。剛勇シッド・カンペアドルは髯を掴んで、

「心配せずともよい。そなたらにとつてなにも悪いことはない。神これを嘉したまえば（……）あの太鼓、半月もせぬうちそなたらの前へ持つてこさせ、どのようなものか見せてやろう。そのあととはドン・ハロニモ司教へ渡し、神のおん母、聖母マリア大聖堂の中に吊るさせよう」

シッド・カンペアドルは大聖堂を聖母に捧げておりました。愁眉を開く婦人たち。恐れは雲散霧消してゆきま



した。やがてモロッコ軍の騎兵が猛然と突撃を開始、果敢に畑地へ駆け入ってまいります。それを見て見張りが早鐘を打ち鳴らせば、手ぐすね引いて待ちかまえていたキリスト教勢は、心得たとばかりに支度整え都城の外へ打つて出る。そうしてモロ勢に近づくと、猛烈な勢いで襲いかかり、さんざん打ちのめして農地から追い払いました。その日討ち取った敵の数は五百をくだらず。シッド軍は追撃して敵陣営へ肉薄。こうして十分な戦果を挙げたのち、引き揚げにかかりました。ただ、アルバル・サルバドレスが捕らえられ、敵陣に取り残されました。ミオ・シッドの禄を食む者たちは、彼のもとへ凱旋してまいりますと、その前へ進み出て、あるじがその目で見ていた働きを口々に報告いたしました。ミオ・シッドは一同の奮戦に満足いたしました。

「一同、聴いてくれ！ これで終わってはなるまい。今日はよき日であったが、明日はこれにまさる日とせねばならぬ。明朝、夜明け前、一同いくさ支度を終えたらば、ミサにあずかりドン・ヘロニモ司教に罪の赦しをもらうのだ。それが済んだら馬に乗り、造化の神と使徒聖ヤコブのみ名のもと、夜明けを期して出陣しよう。日々の糧を奪われなくては、敵を打ちのめすほか道はない」

するといつせいに「おう、心得た！」と声があがりました。すかさずミナーヤが申し出ます。

「そのおつもりであれば、シッド、わたくしに別命を。百三十騎をあずけ別動隊としていただきました。殿が攻めているあいだに背後から突っ込みましょう。そうすれば両方、少なくとも一方で天祐に恵まれるかと」

聞いてシッドは「相わかった」と。

日が暮れ夜が訪れると、キリスト教戦士らはきびきびと支度をはじめました。朝まだき、二番鶏の鳴く時刻、ドン・ヘロニモ司教はミサを執り行ない、終えると一同に総赦免を与えました。

「この戦いで、敵に立ち向かい討ち死にする者の罪を赦す。神はその魂を迎えたまうであろう。——殿、よき星のめぐりのもと剣を佩きしシッド・ドン・ロドリゴ、今朝ミサを執り行なってさしあげた見返りに、ひとつお願いしたいことが。どうかお聞き届けを。なにとぞ拙僧に先陣をお許しくださいますよう」

カンペアドルは答えて「この場で許す」と。

全軍鎧兜に身を固め、塔の林立するバレンシアの都城を出ました。その間ミオ・シッドは家臣らに、たえず的確な指示を与えていきます。それぞれの門には抜かりのない者を配置。一分の隙もなく鎧兜に身を固め、愛馬バビエカに打ち跨って出陣したミオ・シッド率いる四千に三十届かぬ軍勢は、軍旗を押し立てバレンシア城外へ出ると、武者震いして五万の敵に襲いかかりました。挟み撃ちにするアルバル・アルバレスとアルバル・ファネス。神、嘉したもうて勝ちいくさとなるのは疑いなし。ミオ・シッドは槍をふるい剣を抜き、肘から返り血が滴り落ちるまでにモロをさんざん討ち果たし、屍の山を築きました。果てはユセフ王その人にまで三太刀。しかし王は駿馬の足にものをいわせてシッドの剣から逃れ、名城クレラ城へ逃げ込みました。ビバールの人ミオ・シッドは、勇猛な家臣らと一団となつてぎりぎりまで追いつきましたが、城を目前にして空しく引き返すほかございませんでした。けれどよき星のめぐりのもと生を受けし人は、味方が得た戦利品には大満足。他方、なんたる名馬よとバビエカを褒めちぎりました。敵から勝ち取ったものはそっくりシッドのもの。モロツコ勢は五万を数える大軍でございましたが、そのうち逃げおおせたのはわずかに百と四人。ミオ・シッド軍は、いくさ場に遺棄された品々をかき集めにかかりましたが、金銀は全部で三千マルコ、その他の品々となるとも数えきれません。ミオ・シッド主従は天が恵みを垂れ、勝利をもたらしたもうたことを、皆で喜びあいました。こうしてモロツコ王を撃退したのち、シッドは戦利品の詳細な目録作りのためアルバル・ファネスを残し、みずからは百騎を伴つてバレンシアへ戻りました。兜と鎖頭巾をとつたあとの顔には鎖の跡。バビエカの背に揺られ、抜き身を手に城門をくぐると、待ち受けていた婦人たちに迎えられました。ミオ・シッドは手綱を引いてその前に止まり、

「やあ、いま帰った。そなたらのためおおいに名をあげてまいったぞ。そなたらがバレンシアを守ってくれているあいだに、いくさで勝ちを収めた。そなたらが当地へやってきたあとこれだけのものが手にはいるとは、この勝利、神のお恵み、諸聖人あげてのお恵みに相違ない。どうだ、この血の滴る剣、馬の汗。いくさ場でモロどもはこのようにして打ち破るのだ。わたしの命がもう少し長かれと神に祈っているとよい。やがてそなたらは栄

光の座へ登り、誰もがその手に接吻することになろう」

ミオ・シッドは下馬しながらこう申しました。地面におり立ったカンペアドルの前に侍女らと娘たち、そして高貴な妻がひざまずき、

「わたくしどもは死ぬも生きるもあなたにしたい。どうかいつまでもお健やかに！」

それからシッド以下揃って広間へゆき、おのおの美麗な椅子に腰掛けました。

「なあ、妻よ、ドニヤ・ヒメーナ、そなたに頼まれていたな？ そなたの連れてまいったこのまめまめしく仕えてくれる侍女たち、この家臣らの中から婿選びして嫁がせてやろうと思う。一人あたり二百マルコ持たせるつもりだ。いかなるあるじに忠義を尽くしたか、カステイリーリャじゅうに知れわたるようにな。ただし娘たちについてはそう急ぐ必要はあるまい」

侍女らはいっせいに立ちあがってシッドの手に接吻いたしました。広間は喜びに満ち溢れました。その後、ことはシッドの言葉どおり運ばれました。

ミナーヤールバル・フアネスは依然都城の外、いくさ場にあつて、役目の者らに指図し、品々を数えたり書き留めたりしておりました。幕舎、武具、上等の服が大量に、それこそ掃いて捨てるほどございました。わけでも、皆様、特筆すべきはなにかと申せば馬の数。いったい全部で何頭の鞍置き馬が捕まえる者のないまままよつてゐるやら、数えきれぬものではございません。土地のモロにいくらか持つていかれたものの、それでもなお良馬として選び出されたうち、千五百頭が名高きカンペアドルのものとなりました。ミオ・シッドにこれほどの分配があつた一方、他の人々も十分満足するだけの馬を得ました。美麗な天幕、装飾を施したその支柱、ミオ・シッド主従はこれも数限りなく手に入れました。なかでもモロッコ王の幕舎は他に抜きん出て豪華。それを支える二本の柱には、金の細工が施されておりました。よき星のめぐりのもと生まれいでしミオ・シッドルイ・ディアスは、その幕舎を立てたままにしておくよう、誰もそこから取り去らぬよう命じました。

「モロッコ渡りのこのように見事な幕舎、カステイリーリャのアルフォンソ国王陛下へご献上申すつもりだ」

ミオ・シッドが多少なりとも財を成したとのご報告、信じていただくための証拠の品、というわけでございます。集められたこの莫大な富はバレンシアへ運び込まれました。腕も折れよとばかりに奮戦し、モロの屍の山を築いた傑僧ドン・ヘロニモ司教、この人は破格の配分を受けました。これは、ミオ・シッド・ドン・ロドリゴよき星のめぐりのもと生を受けし人が、大将の取り分たる五分の一のうちから、その十分の一を贈ったからにほかなりません。

バレンシアはキリスト教徒の歓喜に沸き返りました。なにしろ財物が、馬が、武器が、山のように手にはいつたのでございます。ドニヤ・ヒメーナと二人の娘、夫を得たも同然の気持ちでいた侍女たち、誰もかも喜色満面。さて、忠臣ミオ・シッドには真つ先になすべきことがございました。

「どこにいる、無二の者よ？ こちらへまいれ、ミナーヤ！ あれしきの配分、なにも礼を申すに及ばぬ。ほんとうに遠慮はいらぬ。このわたしの取り分から好きなだけ持つてゆくがよい。こちらは残りでかまわぬ。ところで、わがものとなったこの戦利品の中から馬を引き連れ、明朝かならず発つてはくれぬか。鞍を置いて手綱を着け、それぞれ剣もひと振り添えるつもりだ。アルフォンソ国王陛下は妻と娘たちに格別のご配慮、ここにこうしてくるのをお許しくださった。おかげで三人は幸せに暮らしている。お礼に馬二百頭ご献上したい。バレンシア領主ともあろう者がと、陛下の誇りを受けぬようにな」

シッドはペロ・ベルムデスにミナーヤへの同行を命じました。翌朝二人は二百騎を供とし、勇んで馬上の人となりました。二人には、み手にご接吻申しあげます、このたびの勝ちいくさで得た財物の中から、軍馬二百頭ご献上しあげます、というシッドの口上が託されておりました。「陛下には死ぬまで変わらぬ忠義を尽くす覚悟」とも。

一行はたいせつに守るべき戦利品の馬を連れ、バレンシアを発つて旅路につきましました。そうして夜を日に継いで休まず進み、国ざかいの山々を越えると、ドン・アルフォンソ王の居場所を尋ねました。そして野越え山越え川を渡つて王のいるバリヤドリドへ到着。ペロ・ベルムデスとミナーヤは使いを立て、一行の受け入れを願いました、バレンシア領主ミオ・シッドよりの献上物を持参いたしました。王の顔がぱつと輝きました。これほ

ど人の喜ぶ様、皆様ごらんになったことはございますまい。王は臣下の貴顕紳士に、一同急ぎ馬に乗れと命じ、みずからも先頭をゆく者に交じつて駆け、よき星のめぐりのもと生を受けし人よりの使いに会いにまいりました。そこへ向かう一団の中には、それ、あのカリオンの公子兄弟、それにシッドの仇敵ドン・ガルシア伯の姿も。心弾んでいる者あり、苦々しく思っている者あり——。

よき星のめぐりのもと生を受けし人の使いの者たちは、一団の姿が目にはいったとき、あらかじめ知らせを受けていなかったため、さてはモロの軍兵かとはつといたしました。ドン・アルフォンソ王も思わず十字を切りました。ミナーヤとペロ・ベルムデスはアルフォンソ王の前まで進み、下馬して地面へおり立つと、その前にひざまずいて地に接吻、つづいて王の両足に接吻し、

「なにとぞ、いと誉れ高きアルフォンソ国王陛下！ われら、ミオ・シッドⅡカンペンアドルの名代として、こうしてご接吻申しあげます。シッドは陛下を主君と仰ぎ、みずからを臣下と心得ております。以前たまわりましたご配慮には恐懼感激。陛下、シッドは先頃いくさに勝利。五万の大軍を率いるかのユセフなる名のモロッコ王、これを野で打ち破つて巨万の富を手にし、家臣一同もまた富める者となりました。ついでにはシッドは陛下に馬二百頭ご献上申し、み手にご接吻いたす下さい」

ドン・アルフォンソ王は申しました。

「喜んで受け取ろう。ミオ・シッドに礼を申すぞ。よくぞこのような贈り物をくれた。いつの日か報いてやりたいものだな」

この言葉に多くの者が感激し、王の手に接吻いたしました。このようななか、苦虫を噛み潰したような顔はドン・ガルシア伯。伯ははらわたが煮え返る思いで、一族の者十人ばかりとその場を離れました。

「シッドの働きには驚き入る。武名が高まる一方ではないか。あちらの名があがるぶん、こちらの値打ちは下がるはめになる。こうもやすやすと敵将どもをいくさ場で打ち負かし、死人から奪うごとく馬を連れてこられては、たまったものではない」

一方ドン・アルフォンソ王は言葉をつづけ、次のように申しておりました。

「造化の神と、レオンにおわす聖イシドロ様に感謝したてまつる。この二百頭の馬をミオ・シッドがくれた。シッドからは、この先わが王国へのいつその忠勤を期待してよいかもしれぬな? ところで、そなた、ミナーヤールバル・ファネスよ、そのペロ・ベルムデスも、そなたらを立派な姿でレイ・ディアス||ミオ・シッドのもとへ帰したい。かいがいしく世話いたすよう命じておくゆえ、美服に着替えてゆくがよい。また武器も、どれでもかまわぬ、好みのものを着けてゆけ。馬も三頭ずつやろう。余の手持ちの中から選ぶがよい。おそらく今日のもろもろのこと、いずれも先々悪い結果は招くまい。さような気がいたすぞ」

二人は王の手に接吻し、宿へ向かいました。王は兩名になにひとつ不自由させぬようと、念を入れて指示いたしました。

さて、ここでカリオンの公子兄弟について語らねばなりません。二人は額を合わせ、なにやらひそひそ話——「シッドの武名は高まる一方だ。娘を嫁にと申し出ようではないか。嫁にすれば箔がついて、さぞやうまい汁が吸えるにちがいない」

この二人、こうした下心を秘めて王のもとへゆくと、

「王たりわが生国のあるじたる陛下、お願いがございます。御意に叶えばそれを申しあげたいと。カンペアドルの姫のお二人、われらの妻にとお頼みいただけませぬか。この取り合わせ、先方の箔となり、われらにとつても良縁——」

王は長いあいだじつと考え込んでおりましたが、

「余は忠臣たるカンペアドルを追放し、つらい目を見せた。だがあれは忠義を尽くしてくれた。この縁組、氣乗りがするかどうかわからぬが、そなたらが望むのであれば話をしてみよう」

そうしてドン・アルフォンソ王は、ミナーヤールバル・ファネスとペロ・ベルムデスの二人を呼び、別室へ伴いました。

「話があるのだ、ミナーヤよ、そなたにも聴いてもらいたい、ペロ・ベルムデス。ミオ・シッドⅡカンペアドルは忠義を尽くしてくれている。もうよかろう。赦そうと思う。目通りにまいらなければ、そうせよと伝えよ。それから別件だが、廷臣のことで伝えて欲しい話がある。カリオンの公子ディエーゴとフェルナンドが、シッドの娘を嫁にもらいたいと申しているのだ。ごくろうだが、今度はこちらの心利いた使いとなつて、忠義のカンペアドルにこの話をよしなに伝えてくれぬか。カリオンの公子らと縁を結べば、面目も施し所領もふやすことになるう」

ミナーヤは次のように答え、ペロ・ベルムデスもそれに同意いたしました。

「陛下のお言葉はお取り次ぎ申します。あとはシッドがよきようにいたすかと」

「ルイ・ディアスⅡよき星のめぐりのもと生を受けし者に伝えるがよい、そなたの都合のよい場所で会うゆえ、いずこでもかまわぬ、場所を定めよ、なんであれそなたのためいたすつもりでいる、とな」

以上で王のもとを辞し、帰途についた二人。供を引き連れバレンシアをめざします。剛勇カンペアドルは一行の帰還を知ると、すぐさま馬に乗り、出迎えに向かいました。そうして笑みを浮かべて二人を固く抱擁し、

「戻つたか、ミナーヤ、そなたも、ペロ・ベルムデス！ 兩人ほどの者、どこを探してもそうはみつからぬな！

わが君アルフォンソ国王陛下より、いかなるお言葉を頂戴してまいつた？ ご機嫌うるわしかつたか？ ご献上申したものはお受け取りいただけただかか？」

「それはもうことのほかお喜びになり、なんと殿を赦すと！」そうミナーヤが申しますと、ミオ・シッドは「造化の神に感謝したてまつる！」と。

復命を終えた二人は、くだんの件を話しました。すなわちレオン王アルフォンソ国王陛下よりの依頼——娘をカリオンの公子兄弟に嫁がせぬか、そなたの名誉となり新たな領地も得るであろうゆえ、たつて勧めたい——。それを聞いた忠臣ミオ・シッドⅡカンペアドル、長いあいだじつと考え込んでおりましたが、やがて、

「このようなお話をたまわつたこと、わが主キリストに感謝したてまつる！ わたしは国を追われ、所領を失い、艱難辛苦の末ようやく今の領地を手に入れた身。それが、神に感謝、このたび君寵が戻り、わが子をカリオ

ンの公子方の嫁にとのお言葉をたまわった。兄弟はこのほか気位高く、また廷臣でもあるゆえ、この縁組、本来なら気の進まぬところだが、仰ぎ見る方のお勧めとあつては、そなたらと相談してみねばなるまい。ただしこの件は他言無用にな。天にまします神よ、なにとぞわれらを正しきかたへ導きたまえ！」

「また、ほかにも陛下よりのお言葉をおあずかりしてまいりました、どこでも殿の望みの場所へまいって目通りを許そう、じぎじきに赦免を与えたいと。いかにするのが上分別かは、お目通りのあとお決めになればよろしいかと」

言われてシッドは「うむ、なるほど」と頷きました。

「どこでお目通りなさるかお決めくださいませ」そうミナーヤが促しますと、

「アルフォンソ国王陛下がそうせよとおおせであれば、王たりあるじたるおかたへの深い恭順の印に、お目通りの叶う場所までこちらから出向くのが道理。だが君命とあれば是非もない。わがあるじのお心に適うなら、滔々と流れる大河タホの河畔でお目通りたまわろう」

万事御意のままにとの書状がしたためられ、しつかりと印が押され、たたちに二騎に託して送られました。

書状が誉れ高き王の前に差し出されました。王は文面に深くうなずくと、

「ミオ・シッドよき星のめぐりのもと剣を佩きし者へよしなに伝えよ。目通りは三週間後とする。万難を排しかならずやその場へ赴くであらう」

使者たちはただちにミオ・シッドのもとへ取って返しました。

双方で目通りへ向けて支度が進められました。かつてカステイリーヤで誰が見たでありましょう、これほどの数の立派な槍に育ったラバ、軽快な足の乗用馬、太く逞しく足の強い申し分ない軍馬を？ これほどの数の立派な旗が立派な槍に結ばれるのを？ これほどの数の金銀の心打った盾、マントやチュニック、アンドロス島産の上等の絹布を？ 王はまた大量の酒食を、謁見の支度のなされてあるタホの河畔へ送るよう命じました。堂々たる大随行団が同行する手筈になっておりました。カリオンの公子兄弟と申せば、すっかりのぼせあがっております。



手持ちの金で足りない分は、借りてまで支度するありさま。金銀財宝、望みのままに富を積めると皮算用したの  
でございました。

颯爽と騎乗するドン・アルフォンソ王。随行の人々は大官頭官を筆頭に、じつに夥しい数。カリオンの公子兄弟も派手に供の人数を揃えております。王の供の中にはレオン人あり、ガリシア人あり。けれど数限りなくいたのは、それはもうカステイリーヤ人。一行は手綱を緩め、目通りの場へと向かいました。

バレンシアでも、ミオ・シッドⅡカンペアドルが目通りへ向け支度を急いでおりました。太く遅しいラバ、立派な乗用馬、遅しく足の強い軍馬、見事な武具、それに上等のマントやチュニツクやベール、いずれもいったいどれほどの数にのぼることか！ さらには全員が色染めの衣服を身に纏っております。ミナーヤⅡアルバル・ファネスとかのペロ・ベルムデス、モンテ・マヨル治めるマルティーン・ムニョース、頼もしきブルゴス者マルティン・アントリネス、傑僧ドン・ヘロニモ司教、アルバル・アルバレスにアルバル・サルバドレス、信義の人ムニョ・グステイオス、アラゴンよりきたりしガリンド・ガルシアス、これらの人々がカンペアドルに同行するため支度いたしておりました。加えてバレンシアにいるほかの人々もござって。けれどアルバル・サルバドレスとアラゴンのガリンド・ガルシアスの二人に対しては、その指揮のもとにある者たちを率いて、留守を油断なくしつかり守っているようにとのカンペアドルの指示が出されました。本丸の城門は昼夜を問わず閉ざしておくよう(……)。本丸は最愛の妻と二人の娘、それに母娘に忠勤を励む侍女たちの起居する場所。まこと賢明なよき星のめぐりのもと生を受けし人は、こうして自分が戻るまで婦人らが本丸の外へ出ぬようにしたのでございます。

一行はバレンシアを立。力強く拍車を入れて進みます。夥しい数の太く遅しく足の強い軍馬は、どれもミオ・シッドがいくさで勝ち取ったもの。ただでもらった馬は一頭もなし。こうして王と約束した目通りへと向かいました。

一日早く到着していたドン・アルフォンソ王は、忠臣カンペアドルがやってくるのが見えると、一同とともに最上の礼をもって出迎えました。それを目にしたよき星のめぐりのもと生を受けし人は、真に心許した者たちを

除き、全員その場に留まるよう命じました。そうしてその十五人とともに下馬、かねての考えどおり地面に両手両膝をつくると、野の草を噛んで引きちぎりました。目から滴り落ちる涙——。それほど感極まつておりました。シッドは主君と仰ぐアルフォンソ王に対し、このように恭順の意をあらわしたのでございます。ドン・アルフォンソ王はこうして足もとにひれ伏す姿を見て、激しく心を打たれました。

「立つがよい、さあシッド＝カンペアドルよ！ 接吻は手に、足ではなく。聞けぬとあれば寵を戻すわけにまいらぬぞ」

カンペアドルはひざまずいて、

「おそれながら、わが生国のあるじ！ この姿にてわたくしにお赦しを。この場の誰にも聞こえるよう」  
すると王は、

「おお、よいとも。この場にて赦し、寵を戻そう。そなたは今日よりわが王国の一員」  
ミオ・シッドはそれに答え、次のように申しました。

「かたじけのうございます！ お言葉ちようございます、わが君ドン・アルフォンソ国王陛下。まずは天にまします神に感謝。次は陛下に、それからこうして周りにお控えのかたがたにも」

シッドはひざまずいたまま王の手に接吻、ついで立って口で接吻いたしました。誰もがこれを喜びましたが、アルバル・ディアスとガルシ・オールドネスの二人だけはおもしろからず。ミオ・シッドはふたたび口を開いてこう申しました。

「これぞ造化の神の賜物！ わが君ドン・アルフォンソ国王陛下の寵が戻った。これぞ日夜神のご加護を受けている証し。——陛下、もしも御意に合うなら、わが客となっていただけませぬか？」

すると王は、

「今日ばかりはそうはゆかぬ。そなたは今着いたばかり。われらはゆうべ着いているのだ。そなたこそ余の客となつてもらわねば、シッド＝カンペアドルよ。明日はそなたの望みどおりにいたそう」

ミオ・シッドは王の手に接吻して承諾いたしました。そのときカリオンの公子兄弟がシッドに一礼して、「シッド、ご挨拶申します。なるほど貴殿はよき星のめぐりのもとと生を受けし人。われらにできることがあれば、なんなりとお役に立ちます」

ミオ・シッドは「そう願えればよろしゅうございますな」と。よき星のめぐりのもとと生を受けしミオ・シッド  
 Ⅱルイ・ディアスは、その日王の客となりました。君寵はまことに深く、王はシッドといていつまでも飽きません。とりわけ、短時日のうちに豊かに伸びた髻をためつつがめつ。満場の人々もまたシッドの美髻には目を瞠つておりました。

日が暮れて夜となり、次の日の朝がめぐつてまいりました。輝く夜明け——。カンペアドルは配下の者に命じ、その場につどう全員分の酒食を用意させました。こうしてミオ・シッドⅡカンペアドルは人々を喜ばせました。誰もが目を輝かせ、このような馳走は何年ぶりかと口を揃えました。翌朝、日の出とともに、ドン・ヘロニモ司教がミサを執り行ないました。ミサが終わったのち、王は皆を集めるとすぐに話しはじめました。

「聴くがよい、廷臣一同、伯の面々、インファソンたちよ！ 余はミオ・シッドⅡカンペアドルにひとつ頼みごとをいたそうと思う。キリストよ、願わくはかの者のためにならんことを！ ——そなたの娘二人、ドニャ・エルピラとドニャ・ソルをカリオンの公子らに嫁がせぬか？ この縁組はそなたにとつて名譽、またおおいに利もあると思うが。公子らは二人を望んでおるし、また余のほうからも勧めたい。この場にある者は、わが家臣、シッドの家臣たるを問わず、皆口添えしてくれ。ミオ・シッドよ、そうしてくれぬか。頼みを聞いてくれればありがたい」

「娘たちはまだそれほど歳ではなく、大人とも申せませぬ」とカンペアドルは答えました。「本来なら嫁になどやるべきではございますまい。またカリオンの公子お二人は令名高く、わが娘どころか、さらに高貴な姫君にすらふさわしきかたがた。されど、娘たちの実の親はわたくしとはいえ、お育てくださったのは陛下。われら親子、万事思し召しのままにいたします。ドニャ・エルピラとドニャ・ソルはみ手に委ねますゆえ、どこへなりと

よきところへ嫁がせてくださいませ。わたくしはそれで満足」

「礼を申すぞ」と、王。「そなたにもこの場の皆々にも」

カリオンの公子兄弟はさつと立ちあがり、よき星のめぐりのもと生を受けし人のもとへ歩み寄って、手に接吻いたしました。そうして王の面前でシッドと剣を交換。ことのほか家臣思いのあるじたるドン・アルフォンソ王は申しました。

「さすが忠義の臣、ありがたく思う、礼を申すぞ、シッド。もとより、まずは造化の神にお礼申さねばならぬが。よくぞカリオンの公子らとの縁組を承知してくれた。今よりドニャ・エルビラとドニャ・ソルをこの手で受け取り、正式な妻として兩人へ引き渡そう。そなたの同意のもと成ったこの縁組、そなたにとつて吉と出るよう願っておるぞ。さあ、すでにカリオンの公子らはそなたの婿。連れてゆけ、余はここから引き返すゆえ。銀三百マルコを支度金として二人につけるが、婚礼の費用に使わせるもよし、そなたの裁量でほかに使ってもかまわぬ。二人は大都バレンシアでそなたのもとに置くがよい。婿と娘、皆ともにそなたの子。あとの扱いはそなたの胸三寸だ、カンペアドルよ」

ミオ・シッドは公子兄弟を受け取り、王の手に接吻いたしました。

「王たりわがあるじたるおかたに、幾重にも感謝申しあげます。娘たちの縁を結ばれたのは陛下、わたくしから与えたのではなく」

翌朝、日の出の時刻に、双方、出発地へ引き返すということで（……）合意。ミオ・シッドカンペアドルは、このときまた世の語り草となるような大盤振舞いをいたしました。太く遅しいラバ、立派に育った乗用馬、上等な美服、こうしたものゝを、欲しいと言う者に惜しまず分け与えたのでございます。なにになが欲しいと申し出て、断わられた者は誰もおりません。ミオ・シッドは軍馬についても、都合六十頭分け与えました。そこに居合わせていた誰もが、謁見に随行した幸運を喜びました。やがて夜の帳がおり、散会ということに。王は公子兄弟の手を取り、ミオ・シッドカンペアドルへ引き渡しました。

「さあ、ここにそなたの息子たちが。もはや娘婿なのだからな。二人の扱いは今日よりそなたの裁量だ、カンペアドルよ」

「陛下、賜り物があります。天にまします神が、引き換えに陛下に対し、よき報いを十二分に与えたいですよ！」

ミオ・シッドは愛馬バビエカにひらりと飛び乗ると、

「この場、わがあるじアルフォンソ国王陛下の御前にて申しあげる、婚礼に参列し引き出物を受け取りたいおかたがあれば、この場よりついてまいられよ。さだめてご損とはなりません。——わが生国のあるじたる陛下、ひとつお願いが。陛下は御意によりわが娘たちの縁をお結びになります。本来であれば、いったん陛下に二人をお受け取りただかねばならぬところ。されば、わたくしが娘らを引き渡すべき名代の代父をたまわりたく。わたくしからじかに引き渡したのでは、婿たちも納得せぬかと」

すると王は、

「ここにアルバル・ファネスがおる。——そなたが手を取り、公子兄弟へ引き渡すがよい。こうして余は、当地にいながらにして目の前におると変わらず、花嫁の手を取ることになる。婚礼の終わりまで代父を務め、次に会ったときにでも様子を聞かせてくれ」

アルバル・ファネスは「はっ、承知いたしました」と。

万事手筈が詰められました、それはもう実に念入りに。

「おそれながら、ドン・アルフォンソ国王陛下、誉れ高きあるじ、このお目通りのお札に粗品をお受け取りいただきたく。馬具一式しかるべくつけた乗用馬三十頭、加えて、やはりしかるべく鞍置いて連れてまいった同数の足強き軍馬、なにとぞお納めくださるようお願い申し上げます」

ドン・アルフォンソ王は、

「いやいやこれは驚き入るばかり！ だが、せっかくくると言うもの、受け取っておこう。造化の神と諸聖

人方が、このような心遣いにしかるべく報いたまわんことを！ ミオ・シッドルイ・ディアス、よく礼を尽くしてくれた。そなたからはすばらしいもてなしを受けた。うれしく思うぞ。この命あるうち報いてやりたいものだ。この先息災で暮らせ。余はこれでこの場を去ることにいたす。天にまします神よ、よしなに導きたまえ！」

ミオ・シッドは主君たるアルフォンソ王に暇乞いいたしました。王からは見送りの申し出を受けましたが、辞退してその場で別れました。ごらんあれ、幸運に巡り合った人々が、アルフォンソ王の手に接吻して暇乞いいたしております。

「おそれながら、このことお許しくいただきますよう。われらミオ・シッドに従って大都バレンシアへ赴き、カリオンの公子方とミオ・シッドの姫ドニャ・エルビラ、ドニャ・ソルの婚礼に参列いたしたく」

王はそれを快く受け入れ、皆に許してやりました。国王側の人数が減ったぶん、シッドのほうは膨れあがりました。とても賑やかになったカンペアドル一行、よき星のめぐりのもと奪い取ったバレンシアへ向かいます。ペロ・ベルムデスとムニョ・グステイオスは、カリオンの公子ドン・フェルナンドとドン・デイエーゴの世話を命じられました。この二人はミオ・シッドの屋敷内の養い子の中の双壁。カリオンの公子兄弟の流儀を知ることが役目でした。一行にはアスール・ゴンサレスも加わっておりますが、これはなにかにつけて騒がしく、要らぬことばかりを口にし、なんの取り柄もない人物。道中カリオンの公子兄弟は、それは丁重に遇されました。やがて一行はミオ・シッドが馬上奪い取ったバレンシアに到着。都城が遠くに見えたとき、大歓声があがりました。ミオ・シッドは、ペロ・ベルムデスとムニョ・グステイオスに向かって申しました。

「カリオンの公子方の宿を手配し、そばについているのだ。よいな？ 花嫁のドニャ・エルビラ、ドニャ・ソルとの対面は明朝、日の出の時刻とする」

その夜は各自それぞれの宿へ。本丸へはいったミオ・シッドはカンペアドルを、ドニャ・ヒメーナと二人の娘を迎えました。

「おかえりなさいませ、カンペアドル！ やはりあなたはよき星のめぐりのもと剣を佩いたお人。いついつま

でもご息災で！」

「造化の神のご加護により戻つてまいつた、気高い妻よ！ 世間に胸を張れる娘婿を連れてまいつたぞ。—— 娘たち、父に礼を言うがよい。三国一の花婿だ！」

母娘はシッドの手に接吻いたしました。そして母娘にかいがいしく仕える侍女の面々もかわるがわる——。

「造化の神に感謝、そしてあなたにも、シッド、立派なお鬚の人。あなたのなさることはなんであれまぢがいない。あなたがおいでになるあいだは、この娘たちが貧苦に苦しむことはございません！」

「お父様のお決めたつた縁組であれば、わたくしたちの栄耀榮華は疑いありません」

「妻よ、ドニヤ・ヒメーナよ、まさに天の賜物だな！ ところで、そなたら、娘たち、ドニヤ・エルピラにドニヤ・ソルよ、この縁組によりわれらの誉れはいや増すといえ、よく承知しておいてくれ、じつはわたしが言いだした話ではない。わがあるじアルフォンソ国王陛下に、たつての頼み、そなたらをぜひにと求められたのだ。その押し強さ、ご熱心さに圧倒され、とてもお断わりできず、二人を御手に委ねたしだいだ、娘たちよ。くれぐれも承知しておいてくれ、そなたらの縁を結ぶのは陛下、父ではない」

やがて広間の飾りつけがはじまりました。床も壁も、それはもう美しく飾られます、金銀の縁取りのある絹布や金欄そのほかの贅沢な布が惜しみなく使われ、その広間につどいたい、そこで宴に連なりたいと、皆様方さぞかしそう思召すであろう絢爛豪華さ。やがて家臣一同が待ちかねたように集まってくると、カリオンの公子兄弟に迎えが出されました。二人は晴れ着を纏い、贅沢にめかし込んだ姿で馬に乗つて広間へやつてきて、着くと礼法どおり下馬し……それにしても、なんとまあしずしずと入場してまいることぞございましょう！ ミオ・シッドは家臣一同とともに兄弟を迎えました。二人はシッド夫妻の前で一礼したのち、進んでいつて美しい椅子に腰をおろしました。ミオ・シッドの家臣団は一糸乱れず整然と控え、よき星のめぐりのもと生を受けしあるじの言葉を待ちました。カンペアドルは立ちあがると、

「なすべきことはなさねばならぬ。ぐずぐずしてはならぬ。アルバル・ファネス、わが腹心、股肱の臣よ、こ

ちらへまいれ。ここに控えるわが娘二人をそなたの手に委ねる。承知しているとおり、これは国王陛下とお約束した手筈。あの場で取り決めたことは、なにひとつおろそかにすまい。そなたの手で娘たちをカリオンの公子方へ渡ししてくれ。ついで結婚の祝福を受けさせ、婚儀終了としよう」

言われてミナーヤは「つつしんで承知いたしました」と。シッドは立ちあがった花嫁たちの手をとり、ミナーヤへ手渡ししました。ミナーヤはカリオンの公子兄弟へ向かって申しました。

「貴殿方ご兄弟の前にあるミナーヤ、陛下のお言葉に従いその名代として、貴族身分のこれなるお二人の姫をお渡し申します。誉れある正妻としてお受け取りくださいますよう」

兩人はご機嫌なにごに顔で受け取ったあと、ミオ・シッド夫妻の前へいって手に接吻いたしました。以上の儀式が終了すると、皆で大広間を出て、まっすぐサンタ・マリア大聖堂へ向かいました。入り口では、手早く法衣を身につけたドン・ヘロニモ司教が待ち受けております。司教は新郎新婦に祝福を与え、ミサを執り行ないました。やがて大聖堂から出てきた一同はわれ先に騎乗、都城の外へ飛び出し、砂浜へ向かいました。ああ、なんと見事な槍さばき、剣さばきでございましょう、シッドも、家臣たちも！ よき星のめぐりのもと生を受けし人は、三度まで馬を乗り替えました。カリオンの公子兄弟も巧みな手綱さばきを披露。ミオ・シッドはそれを見て、おおいに目を細めました。やがて一同は婦人たちとともに引き返し、都城の中へ。それから威容を誇る本丸で豪華な祝宴が催されました。翌日ミオ・シッドは七墓的を立てさせ、つわものたちは昼食までにそれを残らず割りました。

祝宴はまる二週間つづきました。終わりに近づくにつれ、招待客は徐々に帰国しはじめました。ミオ・シッド、ドン・ロドリゴ、よき星のめぐりのもと生を受けし人は、乗用馬、ラバ、足の強い軍馬など、馬匹の類いだけで都合百頭ばかりも引き出物として持たせました。加えてマントやチュニツクはじめ山ほどの衣類、さらには金貨銀貨も数えきれぬほど。ミオ・シッドの家臣も、申し合わせて各自贈り物をいたしました。婚礼に参列した者は、欲しいと申し出れば誰もがどっさり与えられ、ひと財産抱えてカステイリヤへ帰ってゆきました。ル



イ・ディアスルよき星のめぐりのもと生を受けし人、婦人たち、さらには家臣らに至るまでもれなく別れを告げ、三々五々去つてゆく招待客。ミオ・シッド主従に好印象を持たぬ者はなく、当然ながら誰もが褒めそやしており、ました。ドン・ゴンサロ伯の御曹司デイエーゴとフェルナンドの公子兄弟も上機嫌。

招待客はカステイリーリヤへ帰り、シッドと娘婿二人はバレンシアに残りました。

カリオンの公子兄弟がそこに暮らして二年近い歳月が流れました。その間、二人は周りからこれ以上ないほどたいせつにされました。シッドにとつても家臣の誰彼にとつても幸福な日々。どうかこの縁組が、聖母マリアと聖なる父の思し召しにより、ミオ・シッドおよびそれをよしとした人に吉と出ますよう！

これにてこの第二歌の物語は読みおわりでございます。皆様のため、造化の神と諸聖人方のご加護をお祈り申しあげます。